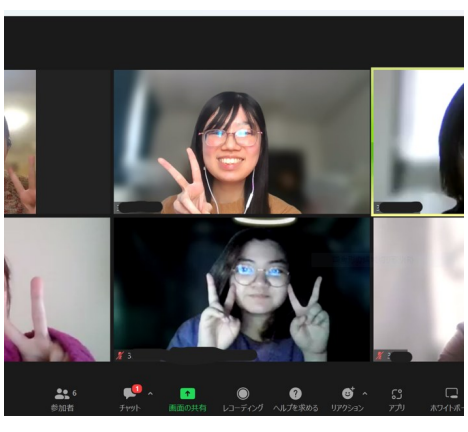
# GYインターンシップ体験記

派遣先：ECOSS（Ecotourism & Conservation Society of Sikkim) インド・シッキム州
派遣時期：2024年2月

私がインターンシップを行ったインドのECOSSは、エコツーリズム推進のための様々な活動を行っているNGOです。ECOSSが活動しているシッキム州は、インドでも有数の自然環境を持ち、観光地として有名です。この地域においては、観光業の発展による利益形成と環境保全のバランスを取ることが最大の目的となっています。そのためにシッキムではエコツーリズムを最適な観光形態としており、ホームステイを通して自然環境の保護を行い、その魅力を自然保護に関心がある旅行客に伝えることを目標としています。本インターンシップの目的は、エコツーリズムがどのように地域経済の利益想像に寄与しているのかを学ぶ事でした。そのために、エコツーリズムを推進している各省庁へのインタビューとホームステイをすることによって、政策を策定する側と実行する側の両方を観察し、シッキムの現状や今後の課題を学びました。これらの体験を通して、エコツーリズムを成り立たせ、持続可能なものにしていくためには地域経済への還元が最優先事項であるという事を学びました。政策決定者と政策実行者が異なる自然保護において、実行者である自然に近い地域の協力を得られるかどうかは、非常に重要な点です。そしてシッキムでは、農村支援やホームステイの指導などを行うことで自然保護と観光業による経済発展を両立させています。このような考え方はどの国でもできるわけではありませんが、国際社会が抱える問題を解決するためには必要な視点であると思っています。そして、インドというこれまでとは全く異なる環境を経験したことで、異文化理解に終わりがないという事を再確認することができました。短い大学生活の中で、アメリカだけでなくインドにも訪れることができ、普通の大学生ではできないような学びを得ました。（教養学部3年/GY13期生　佐藤稜太）

**********

実施先：バナナ農園Villa Soccoro Farm　フィリピン
実施時期：2022年2月



コロナ禍により海外への渡航が難しかったため、私はGYインターンとしてソーシャルマッチ株式会社が提供する「【フードロス×商品企画】フィリピンオンラインSDGsインターンシップ」に参加しました。期間は1か月間で日本各地から28人、フィリピン各地から15人の計43人の大学生が参加し、フィリピンにあるバナナ農園Villa　Soccoro　Farmを舞台に、バナナの皮を使った商品企画を行いました。マーケティングや資料作成など商品開発をする上で必要な知識は全体の講義で学び、マーケット調査や提案する新商品の選定、プレゼンテーションの準備は6つのチームに分かれて、チームごとに活動しました。チームではリーダーを務めさせていただいたのですが、オンライン上で「初めまして」と言葉を交わしたその日にチームとして推す商品を決めねばならず、関係構築が浅薄な中でメンバー全員の意思確認と合意形成を行うことが非常に難しかったです。学年混交の中で委縮せずフラットに意見を言える話し合いの場づくりができているのか、全員の意見を満遍なく拾えているか、日本語と英語で議論を進めて日本・フィリピンメンバー双方が参加できる状態かなど、常に自問自答しながら周りに気を配りつつ議論を行いました。ありがたいことにメンバーに非常に恵まれ、活発な議論に積極的な姿勢、お互いがお互いを助け合う思いやりを持ったメンバーと楽しく円滑に活動することができました。今回のインターンでは数多くの学びを得ることができたのですが、その中でも学校での発表会的なプレゼンテーションと、ビジネスとして行われるコンペティションの文脈でのプレゼンテーションの違いを痛感できたことが大きかったです。とても有意義な経験をさせていただけたことに感謝し、得られた経験や知見をこれからの人生で活かしたいです。
（教育学部4年/GY11期生　上野楓）

**********

派遣先：Sài Gòn bao dung（生活困窮者支援施設）ベトナム　ホーチミン
派遣時期：2023年1月

私は、2023年1月中旬から約2週間、ベトナム・ホーチミン市Tân Bình区にある、生活困窮者支援施設「Sài Gòn bao dung」にて食糧支援ボランティアを経験しました。今回のプログラムは、ベトナムの貧困問題の中でも「都市での内部格差」にアプローチするものでした。近年ベトナムの都市部では、核家族化や地価高騰が進んだ結果、家族と同居できず経済的に一人暮らしもできなくなってしまったお年寄りが、ホームレスになってしまうケースが多く発生していました。そのようなお年寄りに対して「食」という観点から働きかけるため、彼らに対して昼食を提供するボランティアを行いました。このような活動については、「ホームレス」という言葉だけが先行して、ただ雨風や空腹をしのぐために暮らす人々を助けに行くという構図がイメージされがちです。しかし実際に足を運んでみると、他の施設利用者や世界各国から集まったボランティアを含め、その場にいる人とのコミュニケーションがあり、そこから生まれる笑顔もあり、食事を楽しみ、季節の行事などの節目にはみんなでお祝いをするなど、想像よりも笑顔と活気にあふれた「集団生活」がそこにありました。それを見たときに、貧しい人々を助けるというよりは、現地の人々と一緒に問題解決に向けて進んでいくという形で、国際協力は行われていくべきなのだろうと改めて感じたことを覚えています。
（教養学部4年/GY13期　鈴木南結）

**********

派遣先：v-shesh（社会企業）　インド
派遣時期：2023年9月

南インドのチェンナイで、障がいを持つ方の就職支援を行うV-Sheshで３週間インターンをしました。当企業は英語や書類作成、専門知識を教えるトレーニングを行ったり、障がい者が働きやすい環境を整備するために企業に対して指導もしています。インターンでは、オンライントレーニングに参加したり、トレーニング修了生（ogob）が働く会社に行ってインタビューをしました。良くも悪くもコロナ禍で全てのトレーニングがオンライン化されたことで、これまでのインターン生のように直接障がい者の方に会うことはできませんでした。また、食あたりを起こし、１週間ホテルステイになるというアクシデントもありました。しかし、このインターンを通して自分の人生に変化を与える２つの価値観を得ました。一つ目は障がいは個性であり、誰もが持っているものということです。
障害によって苦手な分野があっても得意な分野はあります。これは、大小の違いで私たちにもあるものです。私は人とコミュニケーションを取ることは得意ですが計画を立てるのは苦手です。彼らは、たとえ耳が聞こえなくてもデザインセンスやPCの扱い方は私よりも遥かに上手です。人間はパズルのピースのように突出した部分もあれば、凹んでいる部分もあります。自分の得意な分野で他の人の苦手を補って行くことで、より良い人間関係が構築できるのだと強く感じました。二つ目は、英語はコミュニケーションの一つであるということです。
社長の1人であるShashaank さんに英語力に自信がないということを相談しました。彼は「日本人ってペンケース持ってるよね。英語はこの中の一つのペンなんだよ。君には笑顔やボディランゲージなど、他にもペンがあるだろ。」この言葉をもらって私のコミュニケーションに対する価値観は変わったと思います。
新興国のエネルギーとを肌で感じた経験とV-Sheshでのインターンは多くの気づきを与えてくれました。インターンは何かを達成するものではなく、自ら何かに気づく機会だと思います。ぜひ、途上国へのインターンを楽しんでください。（教養学部3年/GY13期生　前田紗希）

**********

派遣先：JECSA Cambodia　カンボジア
派遣時期：2023年9月

私は大学3年生の9月に2週間、カンボジアでホームステイ型の英語教師インターンシップを行いました。インターンシップは自分の好きな内容のものを選べますが、英語教師を選んだのは自分が主体的に動き続けられると考えたからです。現地では、私の予想以上に主体性と精神力が求められ、辛いことも嬉しいこともたくさんありました。まず、生活環境が日本とは全く異なる環境でした。毎食お腹を壊さないか心配しながらごはんを食べ、綺麗とは言えない水で体を洗い、ずっとステイ先の子供と一緒で休まる時間がない中で業務にあたりました。最初は辛い気持ちを吐き出す場所がなかったのですが、温かいホームステイ先の方の計らいで他の日本人と話す機会をつくってくださったので、前向きに頑張ることができました。ステイ先では、一緒にご飯を作ったり、朝起きて庭の掃除をしたり、ステイ先の親戚に会うなど家族の一員として迎え入れてもらい、本当の意味で現場を経験することができました。業務面では、小学2～6年生を担当し、児童がクメール語を母国語とする中、英語を使って英語を教えることに難しさを感じる日々でした。児童に関する情報がない中で、PDCAサイクルを回しながら状況に応じて臨機応変に対応していました。業務が大変でも、最後まで頑張れたのは、自分の頑張りが少しでも子供の英語力の成長に繋がれば良いなという願いと、子供の元気な姿があったからだと思います。元気いっぱいで体力が無限にある子供たちに日々圧倒されていましたが、英語が大好きな児童が多かったおかげで、毎日「Teacher!」と駆け寄ってくれ、プレゼントをもらい、ファンサービスをしているような気分になれるほど人気者になれました。全体を通して、カンボジアで生活することで自分に自信をつけることができたと思います。辛い環境の中でも、上手く自分と付き合いながら子供たちの笑顔を力にやり抜くことが出来ました。インターンシップを終了して時間がたった今だからこそ、誰にでもできるわけではない素晴らしい経験をしたのだと捉えるようになりました。大学で途上国について勉強する身として、GYに背中を押してもらいながら渡航し、貴重な経験ができて本当に良かったなと感じています！
（教養学部3年/GY13期生　鈴木詩織）